

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：30109

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02622

研究課題名（和文）クィア理論とホモソーシャル理論によるヨハネ福音書の読解

研究課題名（英文）Reading the Gospel according to John through Queer Theory and Homosocial Theory

研究代表者

小林 昭博（KOBAYASHI, Akihiro）

酪農学園大学・農食環境学群・教授

研究者番号：90434878

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ヨハネ福音書におけるイエスと弟子たちの師弟の絆が、ヘレニズム世界の師弟の絆をモデルとして描き出されていることを明らかにしたものである。すなわち、イエスと弟子たちの間の愛を描くために、ヨハネ福音書の著者はホモエロティシズムとホモソーシャルの双方を体現するギリシャ哲学者の師弟間の愛をモチーフとして用いているということである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義はクィア理論とホモソーシャル理論の双方を用いた最初の新約聖書学の分野の研究として位置づけられ、この新たな観点から新約聖書テキストの解釈を試みたことにある。また、本研究の社会的意義はLGBTQIA+の人権の問題が、国際社会のみならず、日本社会においても、喫緊の大きな課題になっている現状において、聖書やキリスト教のLGBTQIA+に対する差別の問題を明らかにし、21世紀の人権の課題に資することにある。

研究成果の概要（英文）：In this research, I have demonstrated that the relationship between Jesus and his disciples in the Fourth Gospel is modeled on the relationship between teacher and disciple in the Hellenistic world. In short, to portray the love between Jesus and his disciples, the author of the Fourth Gospel has used the motif of love between teacher and disciple of the Greek philosopher that embodies both homoeroticism and homosociality.

研究分野：新約聖書学

キーワード：クィア ホモソーシャルティ セクシュアリティ ジェンダー 新約聖書 ヨハネ福音書 同性愛 家族

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

1990年代後半に米国を起源として立ち現れた「クィア理論」(queer theory)を用いた聖書解釈(デイル・B・マーティン、スティーブン・D・ムーア、)は、2000年代中盤になって欧米において本格化するに至った(デリン・ゲスト・ロバート・E・ゴスノモナ・ウェストノトーマス・ボハッチ、テレサ・J・ホーンズビーノケン・ストーン)。だが、本研究が開始される2017年の時点において、日本ではクィア理論を用いた聖書解釈はわたし自身が行ってきた研究をわずかながらに数えるのみであり、未開拓の分野だったと言える。そして、「ホモソーシャル理論」(homosocial theory)を用いた聖書解釈は、日本のみならず、欧米でもほとんどなされていなかったのが現実である。したがって、クィア理論とホモソーシャル理論を併用して新約聖書テキストの読解を試みる本研究は、未知の領域に踏み込む新たな挑戦と言えるものであり、ここに本研究の独創性を認めることが許されると言えよう。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「クィア理論」と「ホモソーシャル理論」を用いてヨハネ福音書を中心とした新約聖書テキストを読み解くことにある。特に、本研究ではヨハネ福音書におけるイエスと男性弟子たちとの関係性に焦点を当て、イエスと男性弟子たちとの間の師弟の絆がこの福音書に特徴的な「愛」によって結び合わされている理由をクィア理論とホモソーシャル理論を用いて読解した。そして、クィア理論とホモソーシャル理論を併用することによって、本研究は聖書テキストのなかにある「家父長制」(patriarchy)、「女性嫌悪」(misogyny)、「同性愛嫌悪」(homophobia)、「異性愛主義」(heterosexism)、「強制的異性愛」(compulsory heterosexuality)、「異性愛規範」(heteronormativity)、「シス規範」(cisnormativity)といった「差別・抑圧の論理」を白日のもとに曝すだけでなく、そこからさらにキリスト教および現代世界のジェンダー・セクシュアリティと関係する差別や抑圧の問題を問い直すことをも試みている。

3. 研究の方法

1991年に米国のテレサ・デ・ラウレティスが提唱した「クィア理論」は、「レズビアン」と「ゲイ」の間にある固有性と差異に注意を喚起し、さらにはレズビアン内部における個々人の固有性と差異、そしてゲイ内部での個々人の固有性と差異を意識化する理論であり、「非異性愛的視点/反異性愛的視点」とでも言う「クィアな視点」から「同性愛/異性愛」や「女/男」という二項対立図式を脱構築し、「異性愛規範」を批判的に読解するための批評装置である。

「ホモソーシャル理論」は、家父長制による男性支配の社会構造が「男同士の絆」(male bonding)によって維持されていることを詳らかにする理論である。「ホモソーシャル」(男同士の絆)は「ミソジニー」(女性嫌悪)と「ホモフォビア」(同性愛嫌悪)によって構成される「家父長制社会」の特質を表しており、「ホモセクシュアリティ/ホモエロティシズム」を排除する社会のシステムとしてこの世界を覆ってきた。だが、この社会システムにはわずかな例外もあり、それが古代ギリシャ・ローマ世界であり、とりわけギリシャ哲学者の師弟愛が体現するように、そこでは「ホモソーシャル」(homosociality)と「ホモエロティシズム」(homoeroticism)を併せ持つ「ホモソーシャルな連続体」(homosocial continuum)が構成されていたのである。

そこで、本研究では「クィア理論」と「ホモソーシャル理論」を新約聖書テキストの読解に複合的に使い、ヨハネ福音書を中心とする新約聖書テキストが「ホモソーシャルな連続体」を構成していることを明らかにすることによって、聖書やキリスト教が抱えている「家父長制」「女性嫌悪」「同性愛嫌悪」「異性愛主義」「強制的異性愛」「異性愛規範」「シス規範」の問題を詳らかにすることを試みた。

4. 研究成果

本研究の成果は、論文や講演などによって公表してきたが、最終的には単著の学術書である小林昭博『クィアな新約聖書 クィア理論とホモソーシャル理論による新約聖書の読解』(風塵社、2023年3月30日刊行、全252頁)を上梓することによって世に問うことが可能となった。本書は「クィア理論」と「ホモソーシャル理論」を併用して新約聖書の読解をする初の研究書であり、さらにはキリスト教やこの社会のLGBTQIA+の人権の課題にも資するものでもあることから、その学術的意義と社会的意義は大きいものがあると言える。

先に触れたように、本書に収めた研究以外にも、これまでに本研究に関わる論文や講演などを公にしてきたのだが、その研究成果の核となる部分は本書において遺憾なく現れており、本書の内容を紹介することが研究成果の報告となるゆえに、ここでは本書の紹介を行うものとする。

本書は二部構成を取っているが、全体の導入として、序章を冒頭に置いている。全体の構成と内容は以下の通りである。

序章「イエスとBL(ボーイズラブ) イエスと男性弟子の恋愛」(3-26頁)では、本書の

目的、構成、内容を予め示しているが、特に本書が「解放の神学」(liberation theology)と「フェミニスト神学」(feminist theology)の系譜を継ぐ研究であることが示されている。

第一部「ホモエロティシズムと師弟愛 ヨハネ福音書における男の絆」(31-102頁)では、「クィア理論とホモソーシャルリティ理論によるヨハネ福音書の読解」を行っている。

第一章「わたしを愛しているか クィア理論とホモソーシャルリティ理論によるヨハネ福音書二一章一五―一七節の読解」(33-58頁)では、イエスとペトロの愛をめぐる対話から、両者の師弟愛を論じた。

第二章「イエスの胸に横たわる弟子 クィア理論とホモソーシャルリティ理論によるヨハネ福音書一三章二―三〇節の読解」(59-82頁)では、イエスとイエスが愛した弟子の身体的な親密性がギリシャ哲学者の師弟愛をモデルとして描かれていることを論じた。

第三章「『見よ、彼は彼をどれほど愛していたことか』 クィア理論とホモソーシャルリティ理論によるヨハネ福音書一四章一―四四節の読解」(83-102頁)では、「ラザロの復活物語」においてイエスのラザロに対する愛が強調されている意味をギリシャ・ローマ世界の師弟愛に社会的に位置づけて論じた。

第二部「クィアな新約聖書」(103-215頁)では、「ジェンダー研究」や「セクシュアリティ研究」から「クィア理論」へと至る研究の足跡を示すことをも意図しつつ、クィア理論を用いた新約聖書の読解を行なっている。

第四章「異性愛主義と聖書解釈——フィレモン書一b―二節におけるフィレモン、アプフィア、アルキッポスの関係性」(105-136頁)では、フィレモン書の受信人である「フィレモン、アプフィア、アルキッポス」の三者を「夫婦」や「家族」として理解してきた従来の聖書解釈が「異性愛主義」を抱えてしまっていることを論じた。

第五章「クィアな家族観——マルコ福音書三章二〇―二一、三一―三五節におけるイエスの家族観」(137-160頁)では、「クィア化する家族」(河口和也)と「〔ヘテロ〕セクシズム」(竹村和子)というクィア理論の批評装置を用いて、「イエスの家族観」が「クィアな家族観」であることを論じた。

第六章「『イエスとクィア』から『クィアなイエス』へ クィア理論を用いた聖書解釈の新たな地平」(161-170頁)では、クィア理論を用いた聖書解釈の研究史を通観し、そこからさらにクィア理論を用いてヨハネ福音書19章25-27節におけるイエスとイエスが愛した弟子の関係性を論じた。

第七章「マリアのクリスマスの回復 文化研究批評(ジェンダー・セクシュアリティ研究)による解釈」(171-181頁)では、ルカ福音書の「降誕物語」が「ミソギユニア」(女性嫌悪・女性蔑視・女性軽視)に満ちていることを明らかにし、失われてきたマリアのクリスマスの回復が必要であることを論じた。

第八章「クィアな聖家族 ルカ降誕物語のクィアな読解」(183-192頁)では、クィア理論によって「ルカの降誕物語」を再読し、ルカの降誕物語が描く「イエス、マリア、ヨセフ」という「聖家族」が「理想的家族」や「規範的家族」ではなく、まさに「クィアな聖家族」としてルカ福音書において立ち現れていることを論じた。

第九章「『聖書協会共同訳』のクィアな批評 教会・キリスト教主義大学・クィアな空間で読む」(193-215頁)では、「同性間性交」(同性愛)に関係するとされてきた新約聖書テキストを取り上げ、従来の研究が「セクシュアリティの観点」を持ち込むことによる誤読を繰り返してきたことを詳らかにし、「ジェンダーの観点」からそれらのテキストを再読することを試みた。

なお、巻末の「あとがき、文献表、引用箇所索引、事項索引、初出一覧」(216-252頁)は、本書が学術書として世に問われるうえで、その学問性を保証するのみならず、本書に続く新たな研究のための道案内の役割をも果たしている。

「あとがき」(216-221頁)では、本研究が科研費研究の成果として上梓されたものであることを謝辞としてしたためることに加えて、本研究の成立過程を読者に示している。また、「文献表」(222-241頁)では、本研究で引用した一次資料と二次文献(研究書、論文)を列挙しており、「引用箇所索引」(247-242頁)では、古典研究に不可欠の古典文書の引用箇所を一覧に供し、「事項索引」(251-248頁)では、本研究にとって重要なトピックを読者に明示している。そして、最後に置かれている「初出一覧」(252頁)では、本書を上梓するに至るまでの本研究の歴史が一目瞭然になっている。

本研究の学術的意義としては、本書がまだ上梓されたばかりであることから、現時点では個人的に好意的な意見などを寄せてくれる研究者はいるものの、正式には今後学会誌などで取り上げられることでその学術的意義が検討されることが予想される。だが、今般上梓した拙著の序章において、「本書を世に問い、ホモフォビクな新約聖書というネガティブな面だけではなく、イエスがクィアであり、新約聖書もまたクィアであることを提示し、ホモエロティシズムに開かれた新約聖書というポジティブな面にフォーカスを当てることで、新たな議論を惹き起こしたい」(小林『クィアな新約聖書』19頁)と明記したのだが、すでにこれまで発表した論文や発表を通して、本研究がクィア理論とホモソーシャルリティ理論を用いた聖書解釈の嚆矢となる学術的意義を有しており、解放の神学の「解放の解釈学」(hermeneutics of liberation)とフェミニスト聖書解釈の「疑いの解釈学」(hermeneutics of suspicion)の系譜を継ぐ新たな聖書解釈として評価されており、今後賛否を含めた学術的議論が起こることが予期される。

また、本研究の社会的意義に関しては、本書が現代世界の火急の課題でもある LGBTQIAP+

の人権の問題に資する研究であることから、すでに基督教の内外を問わず SNS などでも注目を浴びている。本研究において聖書が「家父長制」「女性嫌悪」「同性愛嫌悪」「異性愛主義」「強制的異性愛」「異性愛規範」「シス規範」といった「差別・抑圧の論理」を抱えているというネガティブな面を白日のもとに曝したのだが、それと同時に「イエスがクィアであり、新約聖書もまたクィアである」(小林『クィアな新約聖書』19頁)というポジティブな面にもフォーカスを当てた。本研究を通じて、基督教および現代世界のジェンダーならびにセクシュアリティに関する差別や抑圧の問題を問い直すことにつながっていくことが期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小林昭博	4. 巻 46巻1号
2. 論文標題 「見よ、彼は彼をどれほど愛していたことか」：キア理論とホモソーシャルリティ理論によるヨハネ11:1-44の読解	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 酪農学園大学紀要 人文・社会科学編	6. 最初と最後の頁 19-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小林昭博	4. 巻 76巻12号
2. 論文標題 キアな聖家族：ルカ降誕物語のキアな読解	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 福音と世界	6. 最初と最後の頁 30-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小林昭博	4. 巻 5
2. 論文標題 『聖書協会共同訳』のキアな批評：教会・キリスト教主義大学・キアな空間で読む	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本基督教学会北海道支部 公開シンポジウム記録	6. 最初と最後の頁 83 - 97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小林昭博	4. 巻 0
2. 論文標題 イエスの胸に横たわる弟子：キア理論とホモソーシャルリティ理論によるヨハネ福音書13章21 - 30節の読解	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 （日本新約学会編）イエスから初期キリスト教へ：新約思想とその展開 [青野太潮先生献呈論文集]（リトン）	6. 最初と最後の頁 189 - 210
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林昭博	4. 巻 73巻7号
2. 論文標題 「イエスとキア」から「キアなイエス」へ：キア理論を用いた聖書解釈の新たな地平	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 福音と世界	6. 最初と最後の頁 18 - 23頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林昭博	4. 巻 68号
2. 論文標題 キアなイエス 第6回：「イエスが愛した男 イエスの胸に抱かれたまま食事を 」(ヨハネ13：21 - 30)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 fad：関東神学ゼミナール通信	6. 最初と最後の頁 1 - 1
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林昭博	4. 巻 9号
2. 論文標題 ホモフォビアと聖書解釈：ジェンダーの視点によるローマ書1章26 - 27節の再読	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 キリスト教文化	6. 最初と最後の頁 61-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林昭博	4. 巻 66号
2. 論文標題 キアなイエス 第4回：新約聖書版 B L (ボーイズラブ) (ヨハネ21：15 - 17)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 fad：関東神学ゼミナール通信	6. 最初と最後の頁 3-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林昭博	4. 巻 67号
2. 論文標題 クィアなイエス 第5回：「イエスが愛した男 イエスの胸に抱かれたまま食事を」（ヨハネ13：21 - 30）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 fad：関東神学ゼミナール通信	6. 最初と最後の頁 6-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小林昭博
2. 発表標題 同性愛と新約聖書：セクシュアリティの観点からジェンダーの観点へ
3. 学会等名 西日本新約聖書学会（公開講演会）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小林昭博
2. 発表標題 『聖書協会共同訳』のクィアな批評：教会・キリスト教主義大学・クィアな空間で読む
3. 学会等名 日本基督教学会北海道支部（公開シンポジウム：新しい日本語訳聖書を解剖する）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小林昭博
2. 発表標題 クィアに読む『聖書協会共同訳』と『新改訳2017』：教会/クィアな空間で読む『聖書協会共同訳』と『新改訳2017』
3. 学会等名 日本基督教団北海教区石狩空知地区牧師会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小林昭博
2. 発表標題 セクシュアリティの観点からジェンダーの観点へ：『同性愛と新約聖書』の目的と意義
3. 学会等名 日本新約学会（シンポジウム「クィア神学と新約聖書学の邂逅：小林昭博『同性愛と新約聖書』（風塵社、2021年）をめぐって」）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小林昭博
2. 発表標題 ジェンダーとセクシュアリティから読み解く天皇制の問題：キリスト教・天皇制・近代家族
3. 学会等名 日本基督教団北海教区靖国キャラバンin岩見沢教会（講演会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小林昭博
2. 発表標題 ローマ書1章26 - 27節の釈義的研究：ジェンダーの視点による読解
3. 学会等名 日本基督教団野幌教会「わかいぜ！のっぽろ」学習会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小林昭博
2. 発表標題 同性愛は罪か？：同性愛 / 同性間性交を罪とする聖書テキストを読む
3. 学会等名 日本基督教会北海道中会ヤスクニ・社会問題委員会2022年度公開学習会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 小林昭博	4. 発行年 2021年
2. 出版社 風塵社	5. 総ページ数 501
3. 書名 同性愛と新約聖書：古代地中海世界の性文化と性の権力構造	

1. 著者名 小林昭博	4. 発行年 2023年
2. 出版社 風塵社	5. 総ページ数 252
3. 書名 クィアな新約聖書：クィア理論とホモソーシャルリティ理論による新約聖書の読解	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------